



ふたご学園へヴン²

天野 都

illustration ©神無月ねむ

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

ブローケ

春／＼ふたご女子校の僕？

空高く、雲が穏やかに流れるすがすがしい春。まだ新品の匂いをする制服を着た新入生たちが、満開の桜に縁取られた道を、浮き足立った様子で歩いていく。

いかにもありふれた四月の風景といった趣だが、この学園——私立双月学園（おもしろきしりつそうげつがくえん）には、他校にはない特色があった。

「先生、おはようございます」

「先生、おはようございます」

挨拶の声は二人分。だがその二人の声は、まったく同じだった。

どの生徒も皆一様に、二人一組で登校しているのだ。背格好もほぼ同じ、制服のリボんタイの色も同じ、そしてなにより顔の形が瓜二つ（うりふた）。

もし予備知識なしでこの風景のなかに足を踏み入れたとしたら、見えない鏡がそれ

それぞれのペアの間に存在するのではないかと錯覚してしまいそうなほどだ。一組二組ではなく、行き過ぎる生徒たちがみんな双子なのだから。

それは、今春からこの学園に通いはじめる新入生たち本人も同じらしい。みんな一様に、自分たちと同じように『片割れ』を持つ人々を、物珍しそうに見つめている。

だがそんななか、この場に似つかわしくない苦々しい表情と重い足取りで歩いている新入生がいた。

彼の名は天沼祥。あまぬましやう

趣味はコンピューターのストラテジーゲームとギター演奏。中学の時は、万年補欠ではあったが卓球部にも所属し、それなりに楽しい学生生活を満喫してはいた。もちろん好きな女の子もいた。異性としてはまるで意識されてなかったけれど、女の子の友達もそれなりにいた。

本来なら彼はこの春にごくごく平凡な男子高校生——になるはずだったのだが、現実とは違っていた。

「はあ……夢だったらいいなって、ずっと思ってたけど……」

いまだ自分の現状を直視することができず、祥はぶつぶつと呟いてしまう。

すると彼の隣でびったりとくっついて歩く、彼によく似た片割れの少女が声をあげて祥の肩をばんっ、と叩いた。

「もう。祥ってば、朝っぱらから辛気くさいため息つかないでよ」

仔猫みたいに黒目がちな瞳と、ピンク色の血色のいい頬。顎のあたりで切り揃えられた、まっすぐな髪。いかにも幸せそのものという表情をしているこの少女の名前は、あまめまなつみ天沼菜摘。祥の双子の姉である。

明るくて何事にも積極的な性格で、スポーツ万能、成績も優秀。どんな時でも物怖じせず、いつも明るい笑みを浮かべている。

恐らく自分の積極性や外向性といったものは、母親の体内にいる間に菜摘に根こそぎ奪われてしまったんだろう、と思わざるをえないほどに、その性格は祥と違っていた。

「まさか、本当に双月学園の制服を着られるなんて思わなかったわ。これでこそ、受験地獄を必死で生き抜いた甲斐かいがあったってもんね！ ね、どう？」

菜摘はご機嫌ごきげんな様子で、その場でくるりとまわってみせる。そのたびに、おろしたてのスカートがひるがえ翻るのが嬉しくてたまらない様子だ。

菜摘が身につけている愛らしいボレロ型の制服は、とある有名デザイナーの手によるものらしい。そのデザインは女の子たちに大人気で、制服目当てで入学する生徒も少なくないと、前に菜摘が語っていたのを思いだす。

こうやって、無邪気にはしゃぐ姿は、我が姉ながら可愛いと思えなくなかったが

——祥はどうにも素直に喜べないでいた。

「祥も嬉しいでしょ？　こんな可愛い制服の女の子たちを、間近で見ることができんだから」

まるで当然のように尋ねてくる菜摘に、祥は抗議めいた視線を向けて口を開いた。

「……嬉しいわけではないじゃないか。だって僕は、おと——んぐっ！」

だが決定的な一言を口にしようとした瞬間、菜摘の腕が祥の首をつかまえて口をふさいだ。

「んん？　今、なにを言おうとしたのかな？　祥ちゃんってば」

菜摘は満面の笑みを浮かべ、猫なで声で尋ねながらも、腕で首を絞めあげてくる。

「ちょ……や、やめてよ、苦しいって……！」

「祥ちゃん、さっきなにか言いかけたでしょ？　なにを言おうとしたのかなあ？　ま

さか、せつかくあたしが受験インフェルノをくぐり抜けて合格した双月学園への入学を取り消されちゃうようなこと、口にしようとしたわけじゃないよね？」

質問の形態をとってはいしたが、その言葉には有無を言わせない響きがこめられていた。こうなると祥には、たった一つの答えを口にすることしか許されないので。

「な、なにも言おうとなんてしてないって！　僕も、双月学園に入学できて嬉しいよ！」
絞め殺されそうになりながら、必死に叫ぶとようやく腕が緩んだ。



「そっかあ、祥ちゃんも喜んでくれてるんだ。よかった」

もし天使の顔をした悪魔が実在するとしたら、それはきっと今の菜摘の顔によく似てるんだろう。そんなことを考えつつ必死に息を整える祥の腕を菜摘が引っ張り立ちあがらせる。

「さ、急ごっか。早くしないと、遅刻しちゃうもんね。ほら、スカートのプリーツの位置がずれてるわよ」

そしておもむろに祥が穿いていたスカートの位置を直してくれる。

そう、スカート。これが祥を憂鬱ゆううつにさせている原因だった。

「あんたが男だっていう正体は、絶対にバレないようにしてよ。この双月学園は、女子校なんだからね」

ごく普通の男子高校生になるはずだった祥が今日から通う学校——この双月学園は、由緒正しい女子校なのだ。

「わかったよ……」

（ああ、いったいどうして、こんなことになっちゃったんだろう……）

祥はがくつと肩を落とすと、学校につづく坂を登りつづけた。気分は絞首台の十三階段を登る死刑囚よりも重い。

もう暖かいはずの四月の風が、南極のブリザードのような冷たさに感じられた。